

武蔵野日曜聖書講筈

キリストへの預言

――イザヤ書第52章13節～53章8節――

1995年12月17日

小池辰雄

キリストの預言 どん底の愛 十字架の苦しみ 贖罪 救いの書 マイナスとプラスの交換
究極はみな一人ひとり 損を引き受ける ゼロ＝百 即身 真者・真人 聖書は楽しい力強い
本 自然界では太陽、人間の魂の世界ではキリスト

【イザヤ52】

13 視よ、わがしもべ智慧をもておこなわん。上がりのぼりて甚だたかくならん。
14 さきにはおおくの人かれを見ておどろきたり（その面貌はそこなわれて人
と異なり、その形容はおとろえて人の子とことなれり）。15 後には彼おおくの
国民にそそがん。王たち彼によりて口をつぐまん。そはかれら未だつたえら
れざることを見、いまだ聞かざることを悟るべければなり。

【イザヤ53】

1 われらが宣るところを信ぜしものは誰ぞや、エホバの手はたれにあらわ
れしや。2 かれは主のまゑに芽えのごとく、^{かわ}燥きたる土よりいづる樹株のご
とくそだちたり。われらが見るべきうるわしき容なく、うつくしき貌はなく、
われらがしたうべき艶色なし。3 かれは侮られて人にすてられ、悲哀の人に
して病患をしれり。また面をおおいて避ることをせらるる者のごとく侮られ
たり。われらも彼をとうとまざりき。

4 まことに彼はわれらの病患をおい、我等のかなしみを担えり。然るにわ
れら思えらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるるなりと。5 彼はわれらの
愆のために傷つけられ、われらの不義のために碎かれ、みずから懲罰をうけ
てわれらに平安をあたう。そのうたれし瘡によりてわれらは癒されたり。6
われらはみな羊のごとく迷いておのおの己が道にむかいゆけり。然るにエホ
バはわれら凡てのものの不義をかれのうゑに置きたまえり。

7 彼はくるしめらるれどもみずから謙だりて口をひらかず、屠場にひかる
る羔羊の如く毛をきる者のまゑにもだす羊の如くしてその口をひらかざりき。
8 かれは虐待と審判によりて取り去られたり。その代の人のうち誰か彼が
活けるものの地より絶たれしことを思いたりしや。彼は民のとがの為にうた



れしなり。9 その墓はあしき者とともに設けられたれど死ぬるときは富めるものとともになれり。かれは暴をおこなわず、その口にも虚偽なかりき。

10 されどエホバはかれを砕くことをよろこびて之をなやましたまえり。斯てかれの靈魂とがの献物をなすにいたらば彼その末をみるを得その日は永からん。かつエホバの悦び給うことは彼の手によりて栄ゆべし。11 かれは己がたましいの煩勞をみて心たらわん。わが義しき僕はその知識によりておおくの人を義とし又かれらの不義をおわん。12 このゆえに我かれをして大いなるものとともに物をわかち取らしめん。かれは強きものとともに掠物をわかちとるべし。彼はおのが靈魂をかたぶけて死にいたらしめ愆あるものとともに数えられたればなり。彼はおおくの人の罪をおい愆あるものの為にとりなしをなせり。

【伝道Ⅱ】

7 それ光明は快き者なり。目に目を見るは樂し。

【エレミヤ哀歌5】

21 エホバよ、ねがわくは我らをして汝に帰らしめたまえ。われら帰るべし。

【ヨハネ14】

6 イエス彼に言い給う『われは道なり、真理なり、生命なり、我に由らでは誰にても父の御許にいたる者なし。……16 われ父に請わん、父は他に助主をあたえて、永遠に汝らと偕に居らしめ給うべし。17 これは真理の御霊なり、世はこれを受くること能わず、これを見ず、また知らぬに因る。なんじらは之を知る、彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給うべければなり。18 我なんじらを遺して孤児とはせず、汝らに来るなり。19 暫くせば世は復われを見ず、されど汝らは我を見る、われ活くれば汝らも活くべければなり。20 その日には、我わが父に居り、なんじら我に居り、われ汝らに居ることを汝ら知らん。

●キリストの預言

今日はイザヤ書52章13節から53章8節までで、これはキリストそのものの預言みたいな内容です。

イザヤ書は第一、第二、第三イザヤという三人の人たちが相前後して書いたらしい。弟子とそのまた弟子というようなことです。書いた人の名前は聖書にはない。無名の本です。神さまの御言をいただいて書いている本ですから、また特別な性格をもっている。

構成の方からいうと、第一イザヤ書というのはイザヤ書1章から39章まで。第二イザヤが40章から54章まで、55章から最後までが第三イザヤということになっている。イザヤと



いう、これを書かしめられた人はどうしてこんなことが書けたかと、不思議に思うくらいです。まるでキリストの預言みたいですからね。全く不思議です。

アブラハムは175歳まで生きた（創世記25・7）という。大変な長命です。私は100歳を突破するつもりですけども、175歳にはかなわない。福音のためには何歳であろうと、別に年を数えるわけではありませんが、そういう烈々たる内容のことを時々私は夢の中で示されます。とても不思議です。夢が――「夢か現か」というけれども――まるで現ですね。そういうことがある。

● どん底の愛

では、イザヤ書52章13節から読んでいきます。

13 視よ、わがしもべ智慧をもておこなわん。上がりのぼりて甚だたかくならん。
14 さきにはおおくの人かれを見ておどろきたり（その面貌はそこなわれて人と異なり、その形容はおとろえて人の子とことなれり）。
15 後には彼おおくの国民にそそがん。王たち彼によりて口をつぐまん。そはかれら未だつたえられざることを見、いまだ聞かざることを悟るべければなり。

このイザヤ書53章の始めのところは不思議な言葉だね。どうしてこんなことを書いているかと思う。

1 われらが宣^{のぶ}るところを信ぜしものは誰ぞや、エホバの手はたれにあらわれしや。
2 かれは主のまえに芽え^{めば}のごとく、
3 燥^{かわ}きたる土よりいづる樹株のごとくそだちたり。

おもしろい言い方だね。

われらが見るべきうるわしき容なく、うつくしき貌^{かたち}はなく、われらがしたうべき艷色^{みづえ}なし。

そういう惨めな姿の人だと。

3 かれは侮^{あなご}られて人にすてられ、
4 悲哀^{かなしみ}の人にして病患^{やまい}をしれり。また面^{かお}をおおいて避^{さく}ることをせらるる者のごとく侮^{あなご}られたり。われらも彼をとくとまざりき。

しかしそれは実は、我々の悩み苦しみ悲しみを全部彼がしよっているんだ。大変な文字です。これはどん底の愛です。そういう人がいた。これはキリストの預言的存在なんだ。

4 まことに彼はわれらの病患^{やまい}をおい、我等のかなしみを担^おえり。然るにわれら思えらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるるなりと。

本当はそうじゃないんだと。



●十字架の苦しみ

⁵彼はわれらの愆^{とが}のために傷つけられ、われらの不義のために砕かれ、みずから懲罰^{こらしめ}をうけてわれらに平安^{やすき}をあたう。そのうたれし痕^{きず}によりてわれらは癒^{なを}されたり。

十字架の苦しみを預言しているようなものです。

「平安を与えて、そのうたれし傷によりて我らは癒された」

と。こういうことを書かせられている人は一体どういう人を見て――誰か存在そのものがキリストの預言みたいないない人がいたらしい――それで、「彼は、彼は」なんて書いている。あの註解者は、この「彼」というのは実はこの筆者自身のことだと言っている。そういうことも考えられますけれども、これは誰か本当にそういう人がいたらしい。全くイザヤ書 53 章は不思議なところだ。

⁶われらはみな羊のごとく迷いておのおの己が道にむかいゆけり。然るにエ

ホバはわれら凡てのものの不義をかれのうえに置きたまえり。

我々の不義だの罪だのを彼の上に置いた。正にキリストの預言です。「不義」というのは神さまとの関係が立たないのが不義で、「罪」というのは人と人との関係がよくないのが罪なんです。不義というのは縦の関係で、罪というのは横の関係です。

⁷彼はくるしめらるれどもみずから謙^{へりく}だりて口をひらかず、

本当にキリストはそうだった。カヤパの前でキリストは、何とかかんとかわれたけれども、黙っていた。そして、最後に

「お前は神の子か？」

と聞かれたら、その時はじめて、

「汝の言えるが如し」

とキリストは言われた。

屠場^{ほふりば}にひかるる羔羊^{こひつじ}の如く毛をきる者のまえにもだす羊の如くしてその口をひらかざりき。⁸かれは虐待^{しえたげ}と審判^{さばき}によりて取り去られたり。

もう一人悪人がいたけれども、どちらを赦すかと群衆に聞いたら、悪人を赦してキリストを十字架に架けてしまった。それがあの審判なんだ。群衆は政治的な悪人の方を赦して、「キリストを十字架に架けろ」と言った。

●贖罪

その代^よの人のうち誰か彼が活けるものの地より絶たれしことを思いたりしや。彼は民の^よがの為にうたれしなり。⁹その墓はあしき者とともに設けられたれど死ぬるときは富めるものともになれり。かれは暴^{あらび}をおこなわず、その口にも虚偽^{いつわり}なかりき。



贖罪です。罪をキリストは負って死んだ。そういうことの預言がここに出ている。不思議なものです。こういうことをどうして書かしめられたかと思うくらいです。わが「民」ばかりでなく、全世界の人たちの罪を負っていった。キリストは一人でもって人間の罪過をみな背負っていかれた。

キリストは本当の義人なんです。義人というのは神さまとの関係がしつかり立っていて、神の御意を行っている人が義人なんです。いわゆる正しい人ではない。道徳的な意味ではない。パウロもその角度から、

「^{ただ}義しき人は一人もない。キリストだけだ」

と言っている。その「義しい」というのは神との関係がちゃんと立っている人、神の御意を行ずる人ということです。神意体现する人、神意体现者、これが義人なんです。

「義人なし、一人だになし」

とパウロは言ったが、ただ一人例外がいた。それはキリストだけだというわけです。

そのようにしてキリストはしょうがない我々を救ってくださった。キリストの愛というのは救いということです。我々を救ってくださった。それが愛なんです。

●救いの書

聖書なんて言わなくても、これは全く救いの書なんです。救済書、恵みの書です。いかなる哲学も文学も聖書一卷にはかなわない。有名な哲学も文学も実は土台は聖書からきている。ヨーロッパの偉大な文学はみな根底には聖書がある。

聖書というのは大変な本ですよ。棚の上にあげておく本ではない。しょっちゅう電車の中でも読むような本です。ルターは、

「聖書は炉辺の書だ」

と言った。薪をくべながら暖まりながら、そこで読む本だと。

ルターが聖書をドイツ語に訳した。大変なもんです。ルターのドイツ語がその後のドイツ語の土台になった。非常に詩的なドイツ語です。日本の聖書の翻訳は漢訳聖書をかなり参考にしてやったらしい。

日本語の文語訳は私は好きだ。文語は今の方には難しすぎるかもしれませんが、文語と口語を混ぜたような文体をもつて、私は新約聖書を、できたらそのうちに訳したいと思っています。なにしろ、やりたいことがいろいろあつて困る。

●マイナスとプラスの交換

10 されどエホバはかれを砕くことをよろこびて之をなやましたまえり。

これは十字架のことだよ。

斯てかれの^{たましい}靈魂とがの^{そなえもの}献物をなすにいたらば彼その末をみるを得その日は永



からん。かつエホバの悦び給うことは彼の手によりて栄ゆべし。しかれは己がたましいの煩勞をみて心たらわん。

人々のために自分が苦しむことを楽しいとしている。

わが義しき僕はその知識によりておおくの人を義とし又かれらの不義をおわん。

正にそうだね、これは。素晴らしいことが書いてある。「知識」とはいわゆる知識ではない。深い智慧、奥義と言ってもいい言葉です。根底的な真理のことです。

「義人なし、一人だになし」

という。ところが、この義を与えるんです。義は普通は審く。ところが、これは

「与える義」

なんです。キリストは義をもつて人を審かない。義を与える。マイナスの罪をもらって、プラスの義を人間にくださる。これがキリストの恵みなんです。マイナスを引き受けてプラスをくださる。マイナスとプラスの交換です。これがキリストの救いなんです。これはその預言です。

世の中に例外者がいるかと言えば、ただ一人の例外者はキリストなんです。類なき人です。キリストと比べる人は他にいない。お釈迦さんもキリストにはかなわない。お釈迦さんの世界は悟りの世界だけれども、キリストは悟りではない。本当に生命の愛をたまわるところの世界です。

だから、「信ずる」という言葉はおかしいんだ。キリストを身体で受けとる、体受することです。

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

とパウロが言いました。そういう、一つになっている一如の関係が本当の救いなんです。

「罪の赦し」

という言葉があるけれども、罪の赦しどころではない。罪を全部引き受けてしまっている。

「お前のマイナスは全部私がもらって、私のプラスを全部お前にやるぞ」

と。これがキリストの恵み、救いです。

●究極はみな一人ひとり

キリストが、

「二、三人わが名によりて在るところに我もまた在るなり」

と仰った。百人いても、そこにキリストがいなければダメなんだ。数ではない。在り方の質なんだ。最後は一人になってしまう。「山路越えて」という讃美歌があるね。究極はみな一人ひとりです。本当にキリストと一つになっている人が二、三人集まったら、これは本当に恵福なるかな、楽しきかなです。「神と共に」というが、「共に」ではダメだ。



「神のうちに、キリストの中に」

という、「中に」入らないとね。

だから、「キリスト教」なんていう、「教」という言葉は私は嫌いだ。教えではない。キリストの道なんだ。ヨハネ伝16章に、

「⁶イエス彼に言い給う『われは道なり、真理なり、生命なり、我に由らでは誰にても父の御許にいたる者なし。』」（ヨハネ14・6）

とある。

「我は道なり」

と仰った。「我は教えなり」とはキリストは言っていない。

「キリスト道」

なんだ。教ではない。道は自動車に乗ってはダメだ、歩かなくては。歩いているところは、各々の足だから、路なんだ。我々の歩く所はみな路をつくりながら歩いている。「道路」という。道は天的な内容で、路は地的な内容です。天地相応ずる。それを道路という。漢字というのは凄い。各人の足で歩く所が路だ。歩いている横に草があつたり石があつたりする。路傍の石だとか、路傍の草だとか。

「¹⁶われ父に請わん、父は他に助主をあたえて、永遠に汝らと偕に居らしめ給うべし。¹⁷これは真理の御霊なり、世はこれを受くること能わず、これを見ず、また知らぬに因る。なんじらは之を知る、彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給うべければなり。¹⁸我なんじらを遺して孤児とはせず、汝らに來るなり。¹⁹暫くせば世は復われを見ず、されど汝らは我を見る、われ活くれば汝らも活くべければなり。²⁰その日には、我わが父に居り、なんじら我に居り、われ汝らに居ることを汝ら知らん。」（ヨハネ14・16～20）

このヨハネ伝14章は凄いところで、非常に大事な章です。

● 損を引き受ける

イザヤ書53章にもどります。

¹²このゆえに我かれをして大いなるものとともに物をわかち取らしめん。かれは強きものとともに掠物をわかちとるべし。彼はおのが靈魂をかたぶけて死にいたらしめ愆あるものとともに数えられたればなり。彼はおおくの人の罪をおい愆あるものの為にとりなしをなせり。

人はすぐ、

「得した、損した」

と言う。損得の考えはダメです。得を人に上げて、自分は損を引き受ける。これが福音の世界なんです。



「何も要りません」

と言う。それが本当の「無者」です。無者になると、無限者になる。キリストという無限が入ってくる。「神・キリスト・我」の関係は、自分が無者とされるところにある。無はたまわる。自分で悟って無になったってダメなんだ。キリストは

「お前のマイナスは私が全部引き受けて、お前はマイナスのない人にしてやった。

そこは無即無限無量だ」

という。そこには無限無量の神・キリストの生命が、光が愛がやってくる。その内容は無限無量だ。計算なんかできない世界です。これが福音なんです。

● 0 ≡ 100

福音とは、

「0 ≡ 100」

の世界です。99ではない。段々積み重ねて99になるのではない。「0 ≡ 100」です。100が、無限大が入ってくる。

「無限無量」

というのはいいい言葉だね。損得なんていう相対的な判断はいつまでたっても始まらない。普通の世の中はみなその相対的判断で生きている。

キリストという人は、五千人に五つのパンと二つの魚でみんなが飽き足るようになってしまった。そこで創造してしまう。これは大変な人だね。水を葡萄酒にしてみました。

「瓶に水^{かめ}を満たせ」

と言ったら、飲んでみたら、これが葡萄酒になっていた。

● 即身

我々はもう、いわゆる「信ずる」ではダメだ。いわゆる「信仰」なんていうのではダメなんだ。

「即」の世界です。

「即身」

です。身体が、存在がキリストに即する即身の世界であって、信仰ではない。

「主さまー」

と心の奥で叫べば、直ちにキリストの中に入ってしまったって、キリストと一つになる。これが一番凄い祈りなんです。祈りの一番凄いのは、「主さまー」という全身の内なる叫びで直ちにキリストと一つになること。それ以上の祈りはない。中身なんか何もいらぬ。そこからキリストは具体的なことは何でも今度はやってくださる。大事なのはキリストと一つになることです。明日のことは考えない。今日のこと、今、現に、その所に生きている。これが



「永遠の生命」

なんです。

「今日はダメだけれども明日は……」

なんてのはダメなんだ。それは願望という。いわゆる願望はダメです。即、かなえられる。

●真者・真人

「祈りたることは聞かれたりとせよ」

とキリストは言われた。

「本当に私に祈りこんでみる。現実はそのまま聞かれている。根源（根元）の現実
はちゃんときている」

と。それがいつ相対的現実になるかは知らん。それはその時、その内容によっていろいろになる。とにかく、祈ったら、現にそれは根源的には聞かれている。いつそれが相対的に成るかは、それは神さまの方でなさることだ。そういうような魂胆でいないと、それは本当の平安がない。本当の平安というのは、即、現実、

「今ここにおいて」

というのが本当の平安です。

「まあ今日はしょうがないけれども、明日は」

なんていうのではない。本当の神交の世界はいつも現^{うつ}の世界なんです。信仰ではない、現の世界です。現に在る、現在なんです。

「わがうちなるキリストが見えないか」

というわけです。それが本当の真者、真人なんだ。

「草は枯れ、花はしぼむ。お前たちもそのようなものだ」

と聖書に書いてある。

「ダメだよ、それでは。常に緑している常緑でなくては」

というわけです。枯れないんだ。

楽しいね、聖書は。あなた方、楽しくないですか？ 私は楽しくてしょうがない。大変な書だから。教えるではないから。光と生命に満ち満ちているから。ところが、みんな聖書の意味を考えているんだよな。そんなことではダメだ。

「万巻の書も聖書一巻にはかなわない」

とゲートルがちゃんと saying している。聖書一巻あれば後はどうでもいい。聖書は源泉だから、本当は全部そこから来ている。楽しくてしょうがない。

これはブレイクの詩の一句です。イギリスの神秘的な詩人です。

「To see a World in a grain of sand,

And a Heaven in a wild flower,



Hold Infinity in the palm of your hand,
And Eternity in an hour."

「二粒の砂の中に 宇宙を観る

一茎の野草に 大空を覩る

君の手の掌に無限をつかみ

一刻の中に永遠を持つ」

●聖書は楽しい力強い本

ドイツ人はかなり理屈っぽいから、ドイツは哲学が発達した。ところが、イギリスやフランスは直観的な世界がかなり豊かである。そういうところは、ドイツ人はちよつとイギリス人やフランス人とは違うね。ユゴ一の『レ・ミゼラブル』は素晴らしい。ああいう偉大な文学は根底に深い宗教がなければ現れない。だから、日本にはそういう偉大な文学はないんだ。

「深い宗教をもたなければ本当の文学は成り立たない」

とはゲーテも言っている。我々の生活だつてそうです。学校の先生が内側に本当の宗教をもっていないければ本当の教育はできない。教育学なんて、いくら研究したつてダメなんだ。とにかく、聖書というの楽しい力強い本ですよ。

「⁷それ^{ひかり}光明は快き者なり。目に日を見るは樂し。」（伝道11・7）

偶然にあけたら、ここにちゃんと書いてある。聖書を一卷をあちらこちら読んでごらん。特に旧約では詩篇と預言書です。預言書では特にイザヤ書です。詩篇というのは本当は

「讚美の書」

という意味です。旧約の詩篇というのは歌つたんですよ、讚美歌なんです。イスラエル人は今でも歌うだろうね。

エレミヤ哀歌の中に、

「²¹エホバよ、ねがわくは我らをして汝に帰らしめたまえ。われら帰るべし。」（エ

レミヤ哀歌5・21)

とある。これが本当の祈りなんです。

「あなたの所へ行かしてください。そしてら行きます。力はあなたから来るんです。」

私は歩けません」

と。「帰る」という字は「行く」という字と同じなんです。

●自然界では太陽、人間の魂の世界ではキリスト

この部屋には蛍光灯が照っているけれども、こんなものは要らない。太陽の光が入ってくる。太陽の光は凄い光です。この太陽の光熱でもって我々は、地球上の一切のものは生



きているんだから。もう大変なものです。自然界では太陽。人間の魂の世界ではキリストです。

「我はアブラハムよりも先にありしなり」

とある。キリストは霊的な存在としてアブラハムよりも先に天界にいた。それがやってきた。キリストは一体、何月何日に来たのかは歴史的には分からない。しかも、マリヤは夫のヨセフと交わってキリストを生んだのではない。マリヤには聖霊がやってきて、聖霊の力でキリストは現れたんだからね。大変なものだ。だから、キリストというひとは霊界からやってきたんだ。これは本当に神秘の世界です。

二大宗教はキリスト道と仏道だけれども、キリスト道の方が非常に生命的です。仏道の方はその生命の度合いがちよつと薄い。無いとは言わないけれども。仏の世界だって、最澄、空海、日蓮、法然、親鸞という偉大な坊さんたちは素晴らしい世界に入っている。

聖書はギリシャ語やヘブライ語で読まなくなつて、日本語でいいんだ。日本語でたくさんでいるとは言えない。

あなた方は、光あるところの、また生命あるところの世界を体現しながら、人にそれとなく伝道してください。

「聖書というのはそういう世界ですか」

と。道を伝えなかったら、くさつてしまう。

「道を伝える」

というのは、「伝道」とはいい言葉だね。生活そのものが伝道になる。

聖書はあきないです、全く大変な本ですね。

「聖書を持つてこい」

なんて言わないで、

「大変な本を持つてきなさい」

と言う。「聖書」なんていうと、もったいぶつてしまう。これは、

「大変な本、例外の本」

です。

とにかく皆さんと、こうやって聖書を中心に行っていると楽しい。私は語って楽しい。あなた方は聞いて楽しい。楽しいことは、語るも聞くも同じことなんです。楽しくなかったらウソですよ。ひとつも難しくはない。言葉なんかどうでもいいんだ。

